

『語る兜太』

2016年02月23日

金子兜太氏は国民的な人気を博している俳人である。兜太氏が書いた力強い文字の「アベ政治を許さない」のゼッケンは今や全国各地に広がっている。また「東京新聞」の「平和の俳句」の選者として知られている。黒田杏子氏を聞き手として、兜太氏の生涯『語る兜太 わが俳句人生』を上梓している。黒田氏は「金子兜太 その俳句人生」で下記のように書いている。兜太氏を支え、培ったのは「戦争体験」「職場での冷や飯」「ある時期の俳壇の保守返りと金子まっ殺の風潮」の三つであった。また本人が「覚えておいて下さいね。私はこののちも生涯、私個人の幸福は求めない人間だということ」と語っている。これらの言葉から兜太氏がどんな人で、どんな俳風であったかを伺い知ることができる。

水戸高校2年生の時の句会で「白梅や老子無心の旅に住む」と詠み、好評であった。それがきっかけで、俳句人生が始まり、歩む方向が決定づけられた。この句には、15年戦争に対するレジスタンスの気分が込められていたと言うから、青年時代から反骨精神の持ち主であったということである。

東京大学経済学部を卒業して日本銀行に就職したが、すぐに徴兵され、南洋のトラック島に送られた。米軍の爆撃が終わった後で、激しい爆撃はなかったが、兵站を絶たれ飢饉に襲われた。5万人の兵士のうち、3万人が餓死する悲惨な体験をした。捕虜になり、戦後、日本に帰る時、戦友の死を悼み、「水脈の果て炎天の墓碑を置いて去る」と詠んだ。

帰国後、日本銀行に復職したが、非業の死を遂げた人々を想い、反戦・平和の社会を実現するために体を張らなければならないと決意した。その決意は組合運動に直結した。そのため、出世の道は閉ざされ、栄達を捨てた。地方回りの末、東京勤務になったが、「窓際族」ならぬ「窓奥族」で、日本一大きな日本銀行の金庫の「金庫番」をした。この間、俳句への思いを深め、多くの師と友人を得、学びを深めていく。退職後は、俳壇で、その実力を発揮し、活躍の場を広げた。

どのジャンルでも、論争はあるが、俳壇でも激論が交わされている。俳句は人間や社会をテーマにするものであるか。兜太氏はもちろん、人間や社会との関わりを重視する「現代俳句」の道を志した。形式と自由表現に関しても議論された。形式は「姿」と言い、自由表現は「情」を「こころ」と言い表し、「物の徴」と「情の誠」の関係論争であったという。兜太氏は主観・客観の二物対応でなく、二物を自分の中に溶け込ませ、社会と自分を一つに捉え、映像化することを目指したという。形式・姿を重視すると俳壇は盛況になった。異端児的な兜太氏が批判されたことは容易に想像できる。

兜太氏は、小林一茶が「荒凡夫」と言った「自由で平凡」な考えがお好きだそうだ。「芭蕉親し一茶嬉し夜は長し」の句からも、自由奔放な生き方や俳風を理解することができる。松尾芭蕉は「旅に病み夢は枯野をかけめぐる」と詠んだが、兜太氏は「よく眠る夢の枯野が青むまで」と詠んでいる。この違いが面白い。

「この国は二度と戦争をしてはならない。… 原発のようなものは、この美しい日本には要らないんじゃないか。狭い国土だよ。ともかく、人間がコントロール出来ない装置は廃止して欲しい。安全神話は見事に崩壊したんだ。広島、長崎、沖縄そして水俣。さらに福島だ。人のいのちを大切に。すべての人間が与えられたいのちを生ききる。全う出来るそういう国であって欲しい。それをいま、金子兜太は切に希うね」と語っている。「左義長や武器という武器焼いてしまえ」。左義長とは小正月に行われる火祭りです。それで武器を焼き捨てよと詠んでいる。イザヤの「剣を鋤に、槍を鎌に打ち直せ」と同じである。